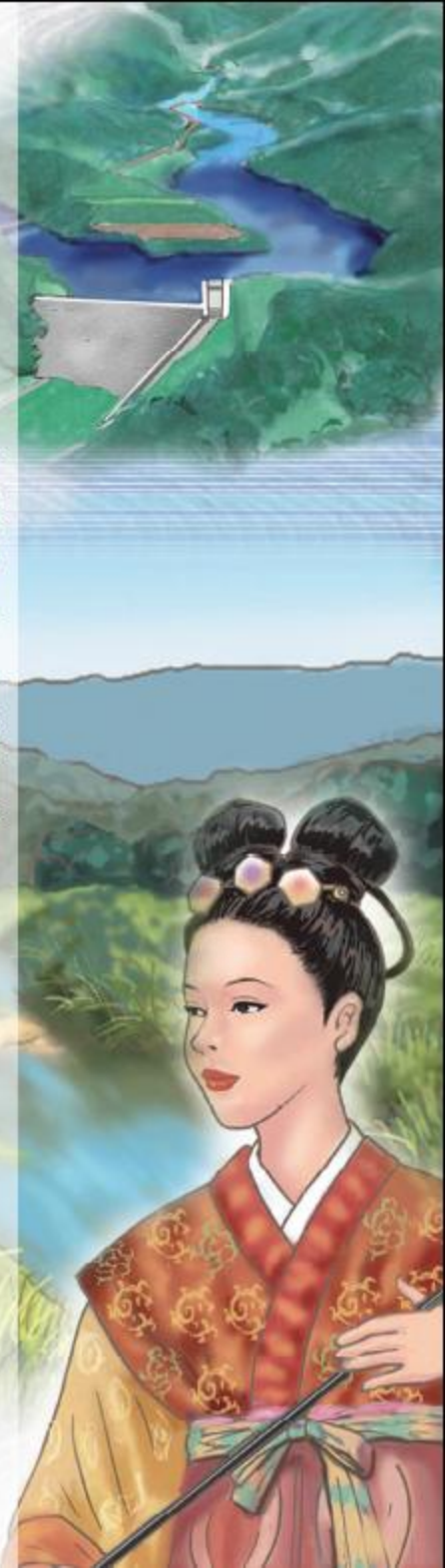




万葉の里 因幡国府
「雨滝川・袋川」物語
— 殿ダム 湖水誕生物語 —

国土交通省中国地方整備局
殿ダム工事事務所

万葉の里 因幡国府
「雨滝川・袋川」物語
— 殿ダム 湖水誕生物語 —



目次

第一話	扇ノ山と袋川	3
第二話	鳥取平野の成り立ち	5
第三話	袋川と千代川	7
第四話	伊福吉部徳足比売と古代の文化	9
第五話	国府と大伴家持	11
第六話	氾濫の記憶	13
第七話	川づくりと鳥取城	15
第八話	傘踊りと雨乞い	17
第九話	うさぎと亀	20
付話	地名が語る物語	21
第十話	エピソード	23
	袋川の流れと出会い	25
	解説文	25



第一話 扇ノ山と袋川

この物語の舞台となる袋川は、東中国山地の東部、鳥取県と兵庫県との県境に位置する、標高・千三百十メートルの扇ノ山を源流としています。扇ノ山^(※1)は古い火山で、主に中生代の火山岩類と花崗岩^(※2)からなり、山肌には溶岩流も見られます。裾野には河合谷のような高原も開けていますが、袋川などの浸食により山あいにはたくさんの滝がかかっています。

鳥取からは扇の形に似ていることから扇ノ山と呼ばれ、那岐山、氷ノ山と共に境界の三山として親しまれています。

兵庫県と岡山県の県境は「因幡山山岳地帯」とも呼ばれています。

他の地に出るときは必ず山越えをしなければならず、蒲生峠・戸倉峠・志戸坂峠・黒尾峠などは、現在も交通の難所となっています。

袋川の流域には、茅を刈り取る山であったという「大茅山」や「宝山」。因幡あるいは稲羽・

伊奈波とも記され、宇倍神社が鎮座する山、宇倍野、上野山とも呼ばれる「稲葉山」。

そして因幡国庁跡の東には「面影山」の五山がそびえています。また、渡来人が住んでいた地とされ、今来・今夜の山と言われていた「今木山」。

武内宿禰が甌^(※3)(蒸し器)を置き飯を焚いた「甌山」。

大陸伝来説のあるエンタシス方式の

円柱で有名な岡益の石堂。

安徳帝が崩御された

ともいわれる「御陵山」。

神垣富士とも呼ばれている「手放山」などの間を流れています。

この地域には「せん」と呼ばれる山^(※4)がたくさんあります。

昔の中国の呉では山を「せん」と呼び、仏教の経典では全て呉音で読んでいるのと関係があるかもしれません。

また、なだらかに開けた土地は「ヶ平」と呼ばれ、

宝殿ヶ平・崩御ヶ平・太閤ヶ平の三つの「平」があります。

雨滝の集落から少し登った所に十王峠^(※4)があります。

法美往来とも呼ばれる雨滝街道から、但馬を通って京都に至る山陰道として重要な役割を果たしてきました。

その昔、豊臣秀吉も通ったと言われ、幕末には通行の要路として番所もおかれていました。

十王とは冥府で死者を裁く閻魔大王らの呼称ですが、この峠はそれほど難所だったのでしょうか。



第二話 鳥取平野の成り立ち

約二百万年前は海面が今より三十メートルほど高かったと考えられています。そのため、今の鳥取平野付近には古鳥取湾^(※5)と呼ばれる海が広がっていましたが、東中国山地から砂礫が流れ込んで、湾の口をふさいでしまいました。さらに砂が運ばれて打ち上げられ、起伏をもった砂丘に成長しました。

約二万年前には、気温の大変低いウルム氷期が訪れ、海の水は雪となって降り積もりました。夏になっても溶けなかったことから、海面が次第に下がっていきました。

最も低い時で、海面が八十メートルほど下がったと考えられ、海岸線は十キロメートル以上も沖合にあったと推定されています。

この海に千代川によって大量の土砂が中国山地から運ばれました。また、阿蘇や大山などの噴火による大量の火山灰も堆積しました。

やがて、湾の入り口を閉じるように砂丘が成長しました。

砂丘には植物が繁茂し、広大な草原が出現しました。

この砂丘を「古砂丘」と呼んでいます。

縄文時代が始まる約一万年前になると気候は再び暖くなりました。陸地の雪や氷が溶けて海面が上昇しました。

最も暖かいときの海面は今より二メートルから六メートルほど高

高かったといわれ、海が内陸部にまで入りこみました。これを

縄文海進と呼び、鳥取砂丘^(※6)の付近には新鳥取湾^(※7)ができました。

鳥取市丸山の離水海食洞^(※8)は、この頃に浸食されてできました。

同じ頃、新鳥取湾に縄文人が暮らすようになりました。

砂礫の堆積が進んだ浅い内湾は良好な漁場で、周囲の森や

林には動物も多く棲んでいました。

縄文時代が終わると、また少しずつ寒くなりました。

二千年ほど前の弥生時代は冷涼期で、今度は海面が

二メートル前後も下がったと考えられています。

千代川による土砂の流入が更に続いた上、海面の低下が重なって、

新鳥取湾は急速に小さくなり、鳥取平野が姿を現しました。

また海底に積もった砂が打ち寄せられ、大きな砂丘に発達して

ゆきました。やがて内湾が海から切り離されいくつもの潟湖が

できました。そのひとつが湖山池です。

多鯰ヶ池も昔は海とつながっていましたが、砂丘が谷を

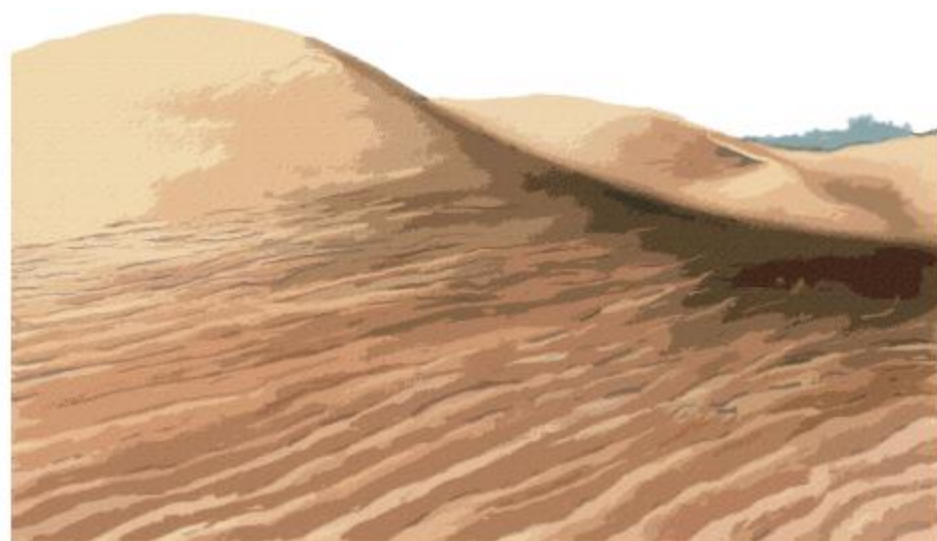
塞いで池となりました。

新しく形成された平野では、弥生人が稲作などの

農耕生活を始めました。

水田は水を得やすい低湿地に作りましたが、洪水の被害から

逃れるため、川沿いの小高い岡などに住んでいたと考えられています。



1万年前



2万年前



200万年前



現在

第三話 袋川と千代川

袋川⁽⁸⁹⁾の「袋」という名前⁽⁸⁹⁾は、一説には、蛇行が激しいことから名付けられたといわれています。特に下流部は地盤が軟弱で浸食が甚だしく、激しく蛇行していました。

昔の記録には、城下町より上流を因幡川と呼び、城川を袋川と呼んだと記されています。

袋川の流れば、四十八滝⁽⁸¹¹⁾からはじまります。

白布を敷いたような「布引の滝」や、水が数段に落ち神秘的な「箱滝」、「亀」という子供の伝説が残る

「亀が淵」、急な流れに樋のようになった三段滝の「樋滝」、二つ並んだ「夫婦滝」や「親子滝」などが

良く知られていますが、他にも数多くの滝があります。

やがて流れは、日本名瀑百選にも選ばれている

雨滝⁽⁸¹²⁾を過ぎ、扇ノ山を取り巻くように

南西に流れ、いくつもの支流を寄せ集めながら流れ下ります。

平野部へ出ると流れを北西に変え、新袋川や

袋川を経て千代川と合流します。



昭和九年、大杵から千代川に注ぐ新しい放水路が完成し、これを「袋川」と呼び、市街地を流れている元の河道を「旧袋川」と呼ぶようになりました。しかし市民の署名活動から、平成十八年四月、「旧袋川」は「袋川」に、「袋川」は「新袋川」に正式に改められました。

千代川⁽⁸¹³⁾は鳥取平野を育んだ母なる川です。

鳥取県八頭郡智頭町の、標高千標高千三百九メートルの沖の山を源流としています。

現在は、鳥取市古市で新袋川と、

浜坂で袋川と合流します。

現在は鳥取市賀露町の鳥取港の東で日本海に流れ注いでいますが、昔は下流付近で

東に大きく蛇行し、鳥取港の位置が河口でした。

昔の資料には「仙大川」「千谷川」とも書かれています。

千もの谷々の流れが集まっていたことから

「千谷」と記し、これを「せむだい」と読んだことから

「千代」の字があてられるようになったといわれています。

また、「泉台」「千体」と記されている書物もあり、

これに関わる伝説⁽⁸¹⁴⁾もあります。



第四話 伊福吉部徳足比売と古代の文化

今から二百年ほど前、鳥取市立宮ノ下小学校の裏山で、伊福吉部徳足比売の骨蔵器を納めた石の櫃が発見されました。

骨蔵器は銅製で、蓋に埋葬の由来を記した百八文字の墓誌が刻まれていました。

墓誌には、古代因幡国の豪族・伊福吉部氏の娘・徳足比売が大和の宮廷に任えていたが、和銅三年（七〇八）七月、大和で亡くなり、火葬されて故郷の因幡国に送られ、埋葬されたことが記されていました。

この墓誌は因幡に残る最古の文字で、骨蔵器は歴史的意義の極めて高い逸品と評されています。伊福吉部は伊福部とも書きます。

因幡国造にしばしば任ぜられた古代の豪族で、因幡一の宮・宇倍神社の宮司を務めたとされています。

鳥取市国府町岡益には、建造の目的がわからないことから謎の石堂（いしどう）と呼ばれている石造物があります。

四角い基壇の上に、高さ約二メートルの円柱が立てられ、

その上にマス形の石や笠石が乗っています。

円柱は、エンタシス（*entasis*）のように中央がふくらんでいます。

また、マス形の石の裏には、ギリシャ文化の影響を受けたと思われるパルメット（忍冬うずまき蓮弁）の浮彫が施されています。

これらのことから、大陸からの伝来説もありますが、全国的にも他に例がありません。

一説には、安徳天皇（*Ando Tenno*）の御陵墓ともいわれていますが、定かではありません。

近くには彩色壁画のある古墳として知られる梶山古墳があります。

七世紀頃の築造で、昭和五十三年に彩色壁画が発見されました。魚をモチーフにした壁画は全国的にも珍しく、奈良県明日香村の高松塚古墳に次ぐものとして高く評価されています。

精巧な構築技術と特異な壁画等、優秀な渡来技術者により築造されたことが伺えます。また、平家一門の墓であるとの言い伝えが残る五輪石堂も直ぐ近くにありま

す。袋川流域は、早くから開け、渡来文化の影響を受けた高度な文化が根付いていたことが分かります。



第五話 国府と大伴家持

因幡⁽⁸¹³⁾には、奈良や京の都に勝るとも劣らぬ文化の香りが満ち溢れています。

鳥取市国府町中郷に、奈良・平安・鎌倉の各時代を通し、政治・経済・文化の中心となった因幡国府跡⁽⁸¹⁴⁾があります。昭和五十二年、地下から建物の遺構が発見され、

国庁の中心建物であることが確認されました。

因幡国は、巨濃・法美・邑美・八上・智頭・高草・気多の七郡からなり、その府を都に近い法美郡においていたことが分かっています。

この国府に接して、国分寺と国分尼寺がありました。

中郷の東隣の庁の集落に自然石の万葉歌碑が建てられています。

『あらたしきとしのはじめのはつはるの
きようふるゆきのいやしげよごと』

（新しい年のはじめにあたって、このようなきれいな雪が降りつづいている。今年もこのように美しい良い年でありますように）
大伴家持⁽⁸¹⁵⁾が天平宝字二年（七五八）に因幡国守に任ぜられ、明るる年の元旦、国庁の館に郡臣を集めて新年祝賀の宴を催し、年頭の所感を歌ったものです。



家持は万葉集二十巻を集成した

編者で、四千五百十六首の最後にこの祝歌を載せました。

万葉集において家持の存在は一際大きく、最も多くの歌を詠みました。最後の歌が、この因幡の地で歌い上げられた事は大変意味深く、国府は「万葉のふる里」と呼ばれています。

因幡国庁跡を取り囲むように飯山・今木山・面影山が三角形に並んでいます。これを大和三山になぞられ、「因幡三山」⁽⁸¹⁶⁾と呼ばれています。

『立ちわかれ いなばの山の峰におふる

まつとしきかば 今帰りこむ』

斉衡二年（八五五）、在原行平⁽⁸¹⁷⁾は因幡の国の国守を命ぜられ単身赴任しました。その途中、須磨の浦で潮水を汲んでいた松風と村雨の美しい姉妹を見染め、二人を同行させました。百人一首の十六番歌として知られるこの歌は、一説には、稲葉山の麓で二人と過ごした四年の日々と、二人を残して帰任する時の別れを惜しんで詠んだとされています。

飯山⁽⁸¹⁸⁾付近の袋川の河原は「万葉河原」、その少し下流は「ケデン河原」と呼ばれています。ケデンとは「血田」から来た地名と考えられ、武内宿禰⁽⁸¹⁹⁾による因幡国遠征で、先住のケデン族を制圧した所と言い伝えられています。



第六話 氾濫の記憶

袋川も千代川も普段は様々な恵みを与えてくれますが、大洪水を起す
暴れ川でもありました。

堤防が幾度も決壊し、濁流が鳥取の中心部を襲いました。また、北西の
暴風雨が吹いて日本海の怒涛が河口に押し寄せると、千代川はみるみる増水し
袋川に逆流しました。さらに上流からの水で、鳥取平野は水で溢れました。

袋川で起きた五つの大洪水を記した「五水記」⁽¹⁸⁵⁰⁾という書物があります。

鳥取藩の藩医中本友直子益が、桃山時代から江戸時代にかけての
約二百年間に起きた洪水について書き残したものです。

五つの洪水の中で、最も被害が大きかったのは、寛政七年（二七九五）の
乙卯水です。千代川右岸の、円通寺と国安の堤防が決壊して水が溢れました。

城下はたちまち水没し、溺死者が六百人を数えました。また、若桜橋より
下流の五つの橋が流失したと記されています。

「生きることも死ぬことも二人一緒 乙卯水・貞女の鑑、豊、の物語」

「憐れ・三郎左衛門」「九死に一生を得た教奇な運命の紋六」など、

当時の洪水の様子が手に取るようにわかります。

旧袋川と千代川が合流する浜坂には、溺死海会塔⁽¹⁸²⁶⁾があります。

卯年水で流された人々の供養塔で、溺死した人々が海に流される悲惨な
光景がこの前に広がっていたのでしょうか。



この洪水は、藩士・鈴木惟忠の書いた「因溢物語」⁽¹⁸²⁷⁾にも記されていますが、

これらは江戸期の洪水について克明に記録され、後世への教訓として貴重な資料です。

高麗水では、川から溢れ出た水が太鼓御門の石壁まで達したと記されています。

八頭郡私部や岡益に残る「水超（越）」という地名から、洪水がその地を越えたことが伺えます。

また国府では、学行院のお堂の上、宇倍神社の境内の庭まで水がきたといわれています。

洪水に関わる様々な伝説も残されています。高草郡河内村には、高麗水によって

山奥の祠が流され、中腹の樹の枝に掛かったという「流れ荒神」伝説。相撲取りが

堤を破り水の勢いを減らし、その時に踏ん張った跡が水溜まりとなった

「溜堀」伝説。洪水の後、山の中腹に小舟が止まっていた「船山」伝説。

鹿野町毛無山の八合目の大岩に船を繋いだ「楫取り岩」伝説などです。

大洪水による悲惨な状況だけでなく、善政と助け合いの心を伝える記録も残されています。

卯年水の時、池田治道は、一つ・町民に炊き出しを施し、二つ・米を貸し、

三つ・藩の倉米を舟で運び安い価格で提供、四つ・物価を高くしたものを

処罰する四つの藩政を行いました。また、一つ・蓄えの無い者にかゆの施し、

二つ・商人たちが米、塩、醤油など格安で提供、三つ・善政に報いんと、

六千人もの町民が率先して堤を修築することを願い出、四つ・富商三人が落ちた

橋を新築し、五つ・水害時、舟をもっていたものは救い乗せ助けた、

という五つの助け合いも記録されています。

我が国で唯一と思われる貴重な資料である「五水記」や伝説から

当時の人々の教訓を受け継ぎ、後世に託したいものです。



第七話 川づくりと鳥取城

鳥取城は天文十四年（一五四五）、因幡守護の山名誠通によって築かれました。天正八年（一五八〇）に羽柴秀吉軍が因幡に侵入しました。

この時、因幡の国人衆・森下道誉と中村春統らは城主・山名豊国に従わず、毛利氏に付き鳥取城に籠り秀吉軍との戦いになりました。

毛利軍の総大将は吉川元春で、吉川経家が鳥取城番として派遣されました。

経家は城兵で鳥取城を守りましたが食料がつき果て、

秀吉の条件をのんで開城しました。世に言う秀吉の鳥取城兵糧攻めで、

四千人が飢餓地獄に追い込まれました。

その頃の袋川は、現在では想像もできないほど激しく蛇行して流れていました。

国府町宮ノ下から奥谷の方に流れ、岩倉・卯垣のすぐ前を通り、

古谷からの天神川を合流して鳥取城下に入りました。

慶長五年（千六百）の関ヶ原の合戦の後、池田長吉公（1628）が六万石で

鳥取城主になり、城を久松山の山頂から山麓に移しました。

町人町や侍町を守るため、袋川の流れも変えて、

本格的な城下町を築きました。

今の市役所付近から醇風小学校付近まで堤を築いて柳を植え、

その外側に堀を造って袋川の水を導き、

洪水にも備えました。これが柳堤と薬研堀（1628）です。



池田長吉公は上流にも手を入れました。

宮下から奥谷に向かって流れていた流れを、

今在家から大杓（おほし）を経て流れるように改修しました。

元和三年（千六百十七）、姫路城主であった池田光政公が

鳥取城主となりました。

光政がまだ幼かったことからお国替えになったものですが、

三十二万石の石高には鳥取城下は手狭でした。

そのため城下町をさらに拡張。薬研堀への流れを整え、

吉方から出合橋までの一、六キロメートルに、新たな川を開削して

桜堤を築きました。

長吉公の造った川より更に外側へ流れを変える大工事で、

薬研堀より内側を侍屋敷に、外側を町人町にしました。

これが袋川の二回目の改修です。

近代の改修は大正時代から本格化しました。

大正七年（一九一八）に水害があり、これを契機に千代川と新袋川の

改修工事がはじまりました。大正十二年（一九二三）にも千代川が

氾濫したことから、工事の促進が求められました。

大正十五年（一九二六）、鉄橋から安長橋間の工事の起工式が現地で

行われ、三万五千人の人々が参列しました。

安長堤防にはそれを称えた改修記念碑が建立されています。



江戸時代、鳥取城には二十数箇所の井戸があり、水道谷のひょうたん池から木管を通して水が引かれていました。

武家はこの水を飲料としていましたが、庶民は袋川の水を飲み水にしていました。藩史には「袋川は、其水質極めて良好、清冽にして、頗る飲料に適す」と記されています。

しかし渇水になると、「袋川法度」⁽⁸³⁴⁾が出され水の利用が制限されました。袋川は水運にも利用されてきました。その人や荷物の乗り降り場となったのが「いと場」⁽⁸³⁵⁾です。今の若桜橋付近から湯所橋にかけての十数カ所に「いと場」があり、海産物などを積んだ行商の人々が、河口の賀露港とを行き来していました。千代川上流から筏として

流されてきた木材は浜坂から袋川に引き上げられ、陸揚げされました。そのため、袋川筋には材木問屋・魚市場・青物市場などが置かれ賑わいました。しかし一方で、水不足の苦勞も耐えませんでした。

江戸時代の終わりのある夏のこと、因幡地方にひどい日照りが続きました。今にも枯れそうな農作物を見て、吾郎作という名のお爺さんが編み笠を持って踊り、氏神様に雨乞いの祈りをささげました。踊りは三日三晩続きました。

願いが通じたのか三日目の夜に雨が降りました。



感極まったお爺さんはさらに激しく踊り狂い、数日後に帰らぬ人になってしまいました。これを悲しんだ村人たちは、お爺さんの霊を慰めようと、彼の踊りをまねて踊るようになったと伝えられています。

明治になって、高岡の山本徳次郎はすげ笠を柄の長い傘に代えて踊ることを考えつきました。その踊りは青年たちに受け継がれ、「因幡の傘踊り」として今に伝わっています。

現在は上地川の上流に棚田⁽⁸³⁶⁾が広がっています。しかし百二十年余り前までは水の乏しい土地でした。先人たちが苦勞を重ね、約四キロメートルも離れた上地川上流の溪流で取水する京ヶ原用水路⁽⁸³⁷⁾を完成させたことから、水田として利用できるようになりました。

国府の平野部に流れ出し、西から北に向きを変えるところに石山堰用水があります。江戸時代にできたといわれ、堰を管理してきた村に因み玉鉾用水⁽⁸³⁸⁾とも呼ばれています。樋門を通った用水は背戸川用水と前川用水の幹線に分かれ、袋川左岸平野を潤してきました。特に前川用水では、大正期に松田平蔵によって掘られたトンネルより導水し、引水の難しかった津ノ井地区の水田を潤してきました。

また袋川には上流の谷村からの七か堰があったといわれています。一方、飲料水も農業用水同様、近年になるまでは充分ではありませんでした。



そのため、鳥取の開業医・田中信慶は明治三十六年（一九〇三）、私財を投じて水源開発の調査を行い、多鯉ヶ池を水源地とする水道敷設の計画書をまとめて市に提出しました。

明治四十一年（一九〇八）には、鳥取市出身の工学士・小林柏次郎が調査し、多鯉ヶ池の溪谷、千代川・雨滝川などを水源とする計画書を作成しました。その後、水源地を美敷とすることになり、大正二年（一九一四）美敷水源地の起工式が行われました。

大正四年（一九一五）に美敷ダムが完成し通水を開始しましたが、完成からわずか三年足らずの大正七年（一九一八）九月、大洪水が起きてダムが崩壊し、美敷で多数の被害をだしました。その後、水源地は復旧されましたが昭和五十三年（一九七八）にその役目を終えました。袋川上流の上地川と雨滝川は、落差の大きい激流で、水力発電所の適地としても着目され、明治三十九年（一九〇六）、岡益の木村安蔵はここに上荒舟発電所^(註33)を設けました。明治四十年（一九〇七）四月、皇太子（後の大正天皇）の山陰行啓を記念し、その宿泊所となった仁風閣や市内各地で、上荒舟からの電気初めて点灯されました。上荒舟発電所は百年の歳月を経た今も発電を続け、地域の文化と産業の発展に貢献しています。楠城集落より少し上流の雨滝川に設けられた拾石発電所と雨滝の発電所は既にその役目を終えましたが、史跡として今も残されています。



第九話 うさぎと亀

有名な因幡の白兔の物語は、鳥取が舞台です。

淤岐島の兔が因幡に渡ろうと、海^{うみ}の和邇^{わに}をだまし一列に並ばせたその上を跳んで渡ります。だまされたと知った和邇は兔を捕らえ、毛皮を剥ぎ取ります。泣き苦しんでいる兔に、先に来た八十神の教えに従って塩水に浴したため症状が更にひどくなりました。

その後によつてきた大穴牟遲神^{おほあなむぢのかみ}に、真水で体を洗って蒲黄^{わがう}の穂綿に包まれば良いと教えられ助けられました。

気多の前は鳥取市の白兔海岸と呼ばれ、沖には淤岐ノ島^{うきのみ}もあります。淤岐ノ島には鳥居があり、兔の形に見えます。近くの白兔神社には、体を洗ったとされる不増不減の池があり、皮膚病や火傷にご利益があるとされています。

兎と同様、亀も昔話などに多く登場しますが、鳥取は亀とも縁の深い地域です。鳥取は池田家の城下町として栄え、国府町にはその墓所があります。

墓所には七十八基の墓碑があり、いずれも亀の形をきざんだ亀趺^{かめふみ}と呼ばれる台石に乗っていることから「亀趺円頭の墓碑」といわれています。また、在原行平の歌にも読まれた稲葉山の宇倍神社のマークは亀をモチーフとしています。

鳥取県と鳥取市とのかたちは、兎と亀にも見えます。このふるさとの形が語りかけるものはいったい何なのでしょう。



因幡は、『古事記』に「稲羽の素戔」とあるように、古くは「稲羽」と書かれています。

一説では「刈り稲の寄せ場」を表しているといわれています。国府は、国の役所が置かれたことに由来します。現在の鳥取(鳥羽)はどうでしょう。

その由来は、水鳥を捕る朝廷の鳥取部が住んでいたことから伝えられています。

かつてはこの一帯が広い沼沢地で、水鳥が多く生息していたことによるといわれています。

かつてこの地域は法美郡と呼ばれていました。

北接する邑美郡に対し「秀邑美」からきたと考えられています。

また邑美は、大海に接していることから、多鯰ヶ池の名は、

千代川や袋川の下流に形成されたラグーンに由来するものといわれています。

袋川の上流に雨滝というが字名あります。

雨滝の名に因んだもので、古くは「天瀧」とも書かれています。

木原はその昔大木がある原でありました。

今でも「夫婦杉」と呼ばれる大杉があります。



石井谷は、昔この村が隣の石井郡へ抜ける谷の入口にあったからと伝承されています。

大石は、集落の奥に大石神社があり、

祭神は開拓神の「御井ノ神」です。

この背後に巨石があり、その由来となりました。

栃本には国指定の栃本廃寺跡があります。

その由来は村にあった栃の木に由来する、

または、「栃」は「土地」のあて字であると地域を中心に

表すものといわれています。

楠城は、米の収穫高から「苗代」と呼ばれ

楠氏ゆかりの地から「楠城」となりました。

拾石は、「十黒」とも書かれ、川向こうに

豆の木があり、一本から十石とれたのであるという

話が伝わっていて、収穫が多いことに由来します。

上地は、高い場所であることからとも、

肥沃で上等な土地からともいわれています。

菅野は菅野大明神があり、酒賀神社がこれにあたります。

荒舟の由来はいくつかあります。

古くは、盤根または普根の地と呼ばれ、未開の荒れた

普根の里から「荒舟根」、「荒舟」へ転じたといわれています。

酒賀神社



拾石神社

山崎城

楠城神社

また、この地方に古くからある水葬の習わしから「荒霊葬送の地」が語られるようになった、また「荒畝」からの転化、山の形が舟の形に似ているからなどといわれています。

山崎は、上地川と雨滝川が合流している

間に挟まれた山の先端から、または大江広元が

城を構え、ここを山崎と名づけたともいわれています。

神護は、郷の大半は菅野大明神の社領だったことから、

社領に生活する人民、つまり「神戸」が「じんこ」

になり「かんこ」に変わったのではないかとあり、

また、神社に仕える女性、すなわち「神子」が

「かんこ」と読まれたことからとも考えられています。

雨滝川の流れの上に、山崎城跡があります。

城主であった毛利氏の所領は法美郡や邑美郡に

広く散在し、三戸古保雲山の砦、正連寺の毛利館、

雨瀧の七曲ノ城など多くの館や砦を有していたと

言われています。

城下には重臣の屋敷が建ち並び、いつしかこの地は

「殿村」と呼ばれるようになりました。

上荒舟の上荒舟神社には『子守神社縁起』という

古代国家の系譜が残されています。

これによると、国府の谷には五つの国がありました。

大肢谷に滝津の国、小肢谷に盤根の国、その中間に須賀の国、

そして谷地町に草邑の国、宮下・岩倉地区に稲葉の国です。

滝津の国は早くから拓けていて社寺や古墳の跡も多く、

盤根（普根）の国は後進荒蕪の地でした。

そして中間にある清浄な須賀の国（天国）の罪を小肢普根の地に

運んで祓い浄めました。小肢普根の地は荒涼たる地域で

人の往き来もまばらで、世を避けて隠れ住む者のためには

恰好の場所で、平家の落人伝説も生まれました。

殿村を中心として袋川流域は、豊かな

水の流れにより早くから農耕が始まり、

また、雨滝街道による交通の

要衝であったことから栃本廃寺のような

高い文化が開いた土地でもありました。

殿村の殿様はそんな地に居を構え

国造りを行いました。

この地で見られる棚田や甘茶、

水車や炭焼きなどの文化は連綿と

後世に伝わってきたのです。

雨滝街道

稲葉廃寺

第十話 エピソード袋川の流れと出会い

昭和九年（一九三四）、大杓から千代川に新しい放水路が完成したことから、これを「袋川」と呼び、市街地を流れている元の川筋を「旧袋川」と呼ぶようになりました。しかし市民の署名活動から、平成十八年（二〇〇六）年四月、「旧袋川」は「袋川」に、「新袋川」は「新袋川」に正式に改められました。

鳥取は「童話・唱歌の故郷」と言われています。日本の近代音楽の基礎を築いた岡野貞一⁽⁸³⁸⁾、田村虎藏⁽⁸³⁹⁾、永井幸次⁽⁸⁴⁰⁾の偉大な音楽家三人の生誕地で、「故郷」を始め、数多くの国民的唱歌がこの三人によって世に送り出されました。「故郷」を作曲した鳥取市生まれの岡野貞一は、長野県生まれの作詞家・高野辰之と共に、その情景を袋川の流るれに思い重ねながら作曲したことでしょう。

袋川流域には、助けたウナギに乗って川を渡った話⁽⁸⁴¹⁾や、橋の架け替えを手伝った犬のお話⁽⁸⁴²⁾の他、蟹の恩返しの話、千代川の漁師と河童の話、谷観音のお慈悲の話など報恩慈悲の話に枚挙にいとまがありません。

袋川は暴れ川ではありますが、流域の人々、川に住む生き物たちそして袋川の精霊が、互いに助け合い、恩返しをし、恵みを分かち合いながら暮らす。そのみなもとの水の流れてもあるのです。

袋川の上流、殿村の地に殿ダム⁽⁸⁴³⁾が建設され、新たな湖水が生まれようとしています。



鳥取平野を流れる千代川そして袋川、流域の暮らしの歴史は水害と渇水との闘いでした。また現在、鳥取市周辺では、新しく住宅が建ち並び様々な産業も興っています。そのため、地域の発展に欠かせない安定した水の確保が望まれています。殿ダムは、水害や水不足から生活を守ると共に、地域の発展に貢献するダムとして建設されています。

鳥取藩国学者衣川長秋が、文政四年（一八二二）に出した『雨瀧紀行』には、ある年の秋雨滝・岩井湯村をめぐった二泊三日の小旅行の様子が書かれています。雨瀧を見るために朝早く出発。稲羽川を渡り、宮下・麻生から新井の石船を見て、吉野では一句詠み、さらに中河原・十石・木原を過ぎ雨瀧の里に至ります。宿泊を依頼した主の案内で、大瀧・箱瀧・布引瀧を見物しさらに六句詠み、その夜は酒を飲み明かします。翌日、十王嶺を越えて、銀山・蒲生・石井の出で湯に赴き宿泊。さらに翌日は、湯山・多ねが池・浜坂を回り、鳥取に帰ってきます。同じような旅は小泉友賢もしていて、このように鳥取を出発して法美往来沿道の名所旧跡を訪ね、名勝雨瀧に遊ぶ旅は因幡の文人墨客にとって、手頃で楽しい旅だったようです。

今、殿の地に新たな湖水が誕生しようとしています。いにしえの文人たちはこれを眺めていたら一体どんな句を詠んだことでしょう。





島々の名は日本海に臨む海岸一帯に鳥砂丘が広がっています。砂丘の範囲は、東が豊後郡の一帯松山（三二四）の麓から始まります。海士・浜浦山、多岐川・浜坂・真瀬、湖山・白尾にわたります。東西約十六キロメートル、南北二キロメートル余りに及びます。鳥砂丘は火山灰土に被覆された豊前市の古砂丘と、中国地方の新砂丘（一般の海岸砂丘）から成る複合砂丘です。東西方面の島嶼は花園岩であり、花園岩は地殻の深いところを固まった火成岩です。これが地殻面に露出するには、長月を越えて上部の地層が剝奪されたことになります。千代川を繞る花園岩の分布が明瞭と本流の智頭谷から中国分水嶺にかけて広く、最も顕しい變遷を受けて大量の砂礫が日本海に運ばれたのはこの地域からであると考えられています。

つまり、鳥砂丘の莫大な砂は、中国分水嶺附近、湖山方面南方などの諸島が侵襲されて千代川によって大量の日本海に放出され、それらが海底に沈積し、後の地形変遷を経て吹き上げられ、海岸砂丘を形成するに至りました。

一万年を単位から瞬かきには次第にその度合いを増して、今から五十六千年は新に最も瞬かくなりました。このため、陸地に閉じ込められた水や水がとけて、海水面が上昇してしましました。温か沖合に浸っていた海岸線は再び廣り始め、最も瞬かくなったところには、現在の海水面より二、三メートルは高くなったといわれています。この温暖化で拡大した海は純文海連といわれ、鳥取砂丘付近は吾々大さ内湾となり、この内湾は新鳥取海連と呼ばれていました。鳥取平野の地下数メートルのところからは数種の貝化石が出ています。この内湾には新たに砂礫が堆積されて埋め立てが行われるとともに、新しい砂丘を作ったため、海岸線が暫えられていき、やがて内湾は埋まれば、古砂丘の断面は砂丘には木が堆積しました。この時期は砂丘の停滯期にあたり、砂丘には草木が繁殖して小型の動物が生ずるようになりました。大きく変わった内湾は貝類の堆積となって人々の生活しやすさが増してきてたため、縄文人が砂丘地に進出して生活するようになります。その生活遺物を今でも鳥取砂丘の長巻館等で展示することが出来ます。

「瀬戸海峽」は海の波流によって形成された瀬と一メートル幅の六メートル、奥行十八メートルの海食洞です。縄文時代（約六千年前）に海面海面上昇した縄文海進によってこの洞窟が形成された。その後の海面によって陸化したと考えられています。現在成金は海岸から遠く離れた場所にあるため、かつての海岸線や取平野形成の地史を今に伝える貴重なものです。



三〇 新川
 新川水系の一級河川。同水系では八重川に次いで二番目に長く、流長二十八、四キロメートルあります。にぎる尾の嶺ノ山に源を発し、黒下流を納める南津川の麓から約四十メートルの南流で右川を合流し、増盛、船石と流れ、殿地区で神領川を、下流の藤門寺地区で上地川をそれぞれ合流し、松原地区で北西に大きく流れを東へて新井・山根、神塚・谷・玉鉢・山生を通過し、南流してきて船敷川と合流したのち、黒下地区や面影山の北、東寺在郷、大社の地区を通り抜けます。
 昭和九年、大社の大規模から西進して青森、古市を通り、千代橋の狭で千代川に注ぐ放水路が完成したため、「新川」と呼ぶようになり、大社を北流し、市街地をゆるやかに流れ、浜坂で千代川と合流する旧河津を「旧新川」と呼称しましたが、平成十八年四月より名称が改められ、新河津が「新新川」、旧河津が「新川」と変更されました。
 別名もいくつかあり、南流より谷までを南津川、天神川と合流する先津の辺りまでを多國府川、天神川と合流する矢津の辺りまでを岡崎川、または國府川、奥殿川の壱をなす川を磯川、法慶郡を流れる区間は法興川とも呼ばれています。

鳥取県と兵庫県の県境に位置する瀬ノ山は、標高一三〇九メートル、国府、那波、八東、若狭の境でもあります。南北になるなだらかな緩峻な峰と、裾野に広がる広大な高原からなり、遠くから眺めると稜の峰に似ていることが名付られたそうです。また、鳥取野の中心、語々嶺あたりから眺めると、稜は平開きにゆつとしたスローlopeで左右に広がっていくことから、「新三」とは西端の西側からこの名ではないかといわれています。新三紀末から第四紀にかけて盛んに噴火を繰り返して山が荒れなり、噴出岩からつづできた標高二メートル付近の台地状地形は美しい高原となっています。

中年代白景輪後半から古第三紀初頭にかけ、大規模で複雑な花崗岩の侵入（へい）にゆづり活動中、中国地方全境にまたがる大規模な花崗岩の侵入（へい）もつとより活動中、花崗岩花崗岩と呼ばれておりました。その時代は五、六千万年ほどは、鳥取県内での侵入花崗岩の時代は古い面積を占めています。この鳥取花崗岩が小規模ながら国内でも古い面積を占めています。最も古い時代の花崗岩となつていゝます。

鳥取県と兵庫、岡山県にまたがる地域には、瀬ノ山をはじめ、「せん」と呼ぶ山が多くあります。大山、磐ヶ山、矢薙ヶ山、水ノ山、藤山、桑山、毛無山、人形山、船越ヶ山、甲ヶ山、黒山など、大抵この地方の人々は山を「せん」と敬称していました。仏教のお寺の経の読みかたでも真言です。そこで山形県神楽湯の山、例え文相野太鼓の赤山、秋の真鳥、梨鳥山、伊予の石城山赤山、京都の雲山、山崎、「せん」が使われている山も多いのです。

西海道 十三時（津島往來）の國府町と別所町の境にあたり、昔から田畑を通じて京都に至る山道として、國府から國主を初め諸侯の臣の往來に實物の運搬などの重要な役割を果たしてきました。戦後國国代々の末、豊前秀吉が牛が喜や七曲嶺を攻めたとき、十王峠を襲ったことも言われています。旧藩時代も但馬や對馬郡に行く通行人の要路であったので、幕末には両端郡界の峠道を「難所」を度いて通行人が取り続けた事もありました。

十王とは、死者が冥途に行きく時、この世でおかしな事を繰ぐ人間魔王とて十人の王の事で、この王たちに懲かれます。来世では善人になるで生れてゆかりの地でもあることから、あの世の入口と傳じて名付られたといふことです。



古馬政野は海でした。花崗岩や安山岩、凝灰岩、火山性堆積物の基岩群が岬状に日本海に突出して、遠浅の大きな湾入を形成していました。

この湾内には基岩割から切り離された多くの島々が点在し、砂を積んだ島に好都合な環境が整っていました。この多くの島々が在する遠浅の大きな湾を古馬政海と呼んでいます。

古馬政海は中国山地から砂礫が運び込まれ、湾内の埋め立てが行われました。

運び込まれた砂や礫は湾内を流れる潮流により、礫・砂・シルトなどにもよく分けられ、大きな礫は河口に流れ、海底部に、細粒の粘土は湾外へ運び去られました。

砂は湾内を移動する間にさらに粒子の大きさが揃い、湾口部の岬島の周辺に付着するように堆積していき、これらの砂は次第にまじり増し、相互につながって湾口部を埋めて海まで発達していき、このように海底に堆積した砂礫（水底下砂礫）には、特徴に人間の狭い水平方向が入っているで、地層の堆積環境を身分する一つの目安となり、この地層は模式地である福部町通山の地名をとって「通山層」と命名されています。

この山層を堆積させた海は、更新世末期に海水面が高まった下海海準、今から二万年程度、と呼ばれる海で、現在より海水面が十五・三十メートルも高かったと考えられています。

27

29

○飯山
因幡國序部から朝日を迎える奥美に峻立する、標高百メートルの小さな尖峰です。武内宿禰が橘の園に入った時、萬葉の嶺山に橘を食せし、この山に「萬し移」を置いて断を焚いたといひ、因幡の里が製鉄や城山の製書で栄えたことを示唆するような意味に由来します。

○今木山
因幡國序部から南東にあり、平野に屹立する標高八十八・九メートルの独立峰です。かつてこの地に今木大神といふ神が居り、地名を導くとする習わしがあつたため、この里は今木といひ、この地の山であるので今キ（志）の山と書かれていたと『因幡集』にあり



平城初期の教人 平城天皇の皇子阿千額王の交際で、六歌仙は三十六歌仙の一人でも在る流行の真箇地にあり得ます。九葉の詩腕、兄弟ともに巨匠として在る氏を驚かします。在るに、この時代、兄弟として並列してゐたのは、また後漢、四時國の国守神代経の筆名號で松風・村雨と通つてゐた日々は新羅「松風」の隠射つものにもなりました。



鳥羽藩の藩主中本友直子孫が、桃山時代から江戸時代にかけての約三百年間に起きた洪水について書き残したもので、文禄二年（一六一三）八月の高瀬水、寛永五年（一六三三）八月の濃水、寛文十一年（一七二一）八月の濃水、宝暦七年（一七五五）八月の印水）について詳しく記されている。

高瀬は、秀吉の朝鮮征伐の時に起きたこと、濃対水は北中国襲えの裏でであったこと、濃対水は田圃時期であったことなどが、名がつけられました。



※26 河尻水と海
乙卯水の湧き出でる場所です。江戸時代、千代川の流れるこの山すそ近くを流れていたのが、掛川と合流した流れが近くに見下ろすことができます。乙卯水での湧き出しが河口からの水の逆流によって海に流れず、多くの死体がこの付近に積み溜まったといわれています。



『茨城物語』とは、五水の一つである夏越七年（二七九五）八月に起こった乙卯水と呼ばれる大洪水の様子を記したものである。久松義士・鈴木忠忠によって書かれた夏越八年（二七九六）九月に書き上げられ、洪水の惨状、津所の処置、市民協会の状況や自らの体験によって導いた洪水時ににおける心導などが記されている。この物語は筆者自身の身辺に即關して、溢れるような人間性に貫き通されているのが特徴的です。

元龜元年（一五七〇）犬山城に生まれ、兄の勝路城主・池田輝政と共に羽後秀吉に仕えました。



墓研とは、墓研の形、すなわちその字形になった墓の狭い形のことをいいます。

池田北町の河身要によって寺町あたりから江崎方面に切り込んで流れる三河川が遡断され、この古川筋が墓研と呼ぶようになり、また、たなな墓研といわれるようになったが、『黒野志』では川筋の跡に左右から次第に特が流れ込むことにより、真ん中ののびが深くなると、墓研の形に似ていくところから呼ばれ始めたのではないかと考案しています。

また、その後、池田奥町が断った時佐野町門から柳屋まで、のちも研究町を計れるようになり、この跡は、昭和二十九年頃にこの工区の概算計画が完成するまでは、西野あたりの所々に残っています。



33